

『新・やまと物語』（第13巻）

タイトル

- 第94章 へいあん 平安時代（上）
- 第95章 おののこまち 小野小町
- 第96章 へいあん 平安時代（下）
- 第97章 なんぼくちょう 南北朝時代（二朝時代）
- 第98章 せんごく 戦国時代
- 第99章 きんせい 近世（安土・桃山・江戸時代）
- 第100章 げんだい 現代及び未来 みらい

新・やまと物語 (13)

こ が けい きく
古閑炯作



画像提供：東海大学情報技術センター

/



画像提供：東海大学情報技術センター



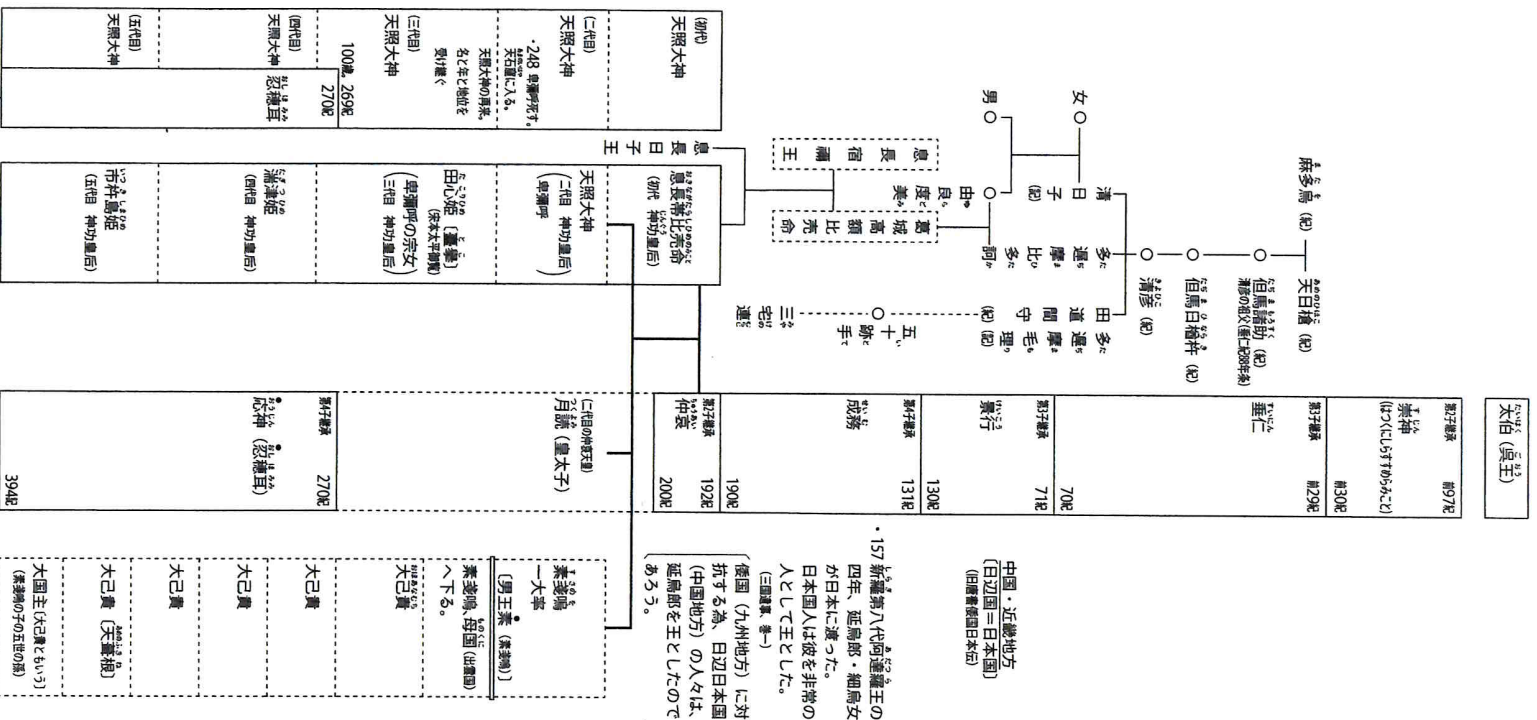
(拡大映像)

【第1表】系譜

万世一系の
思想によって作られた系譜
(記・記の系譜)

この物語における系譜

A3に印刷



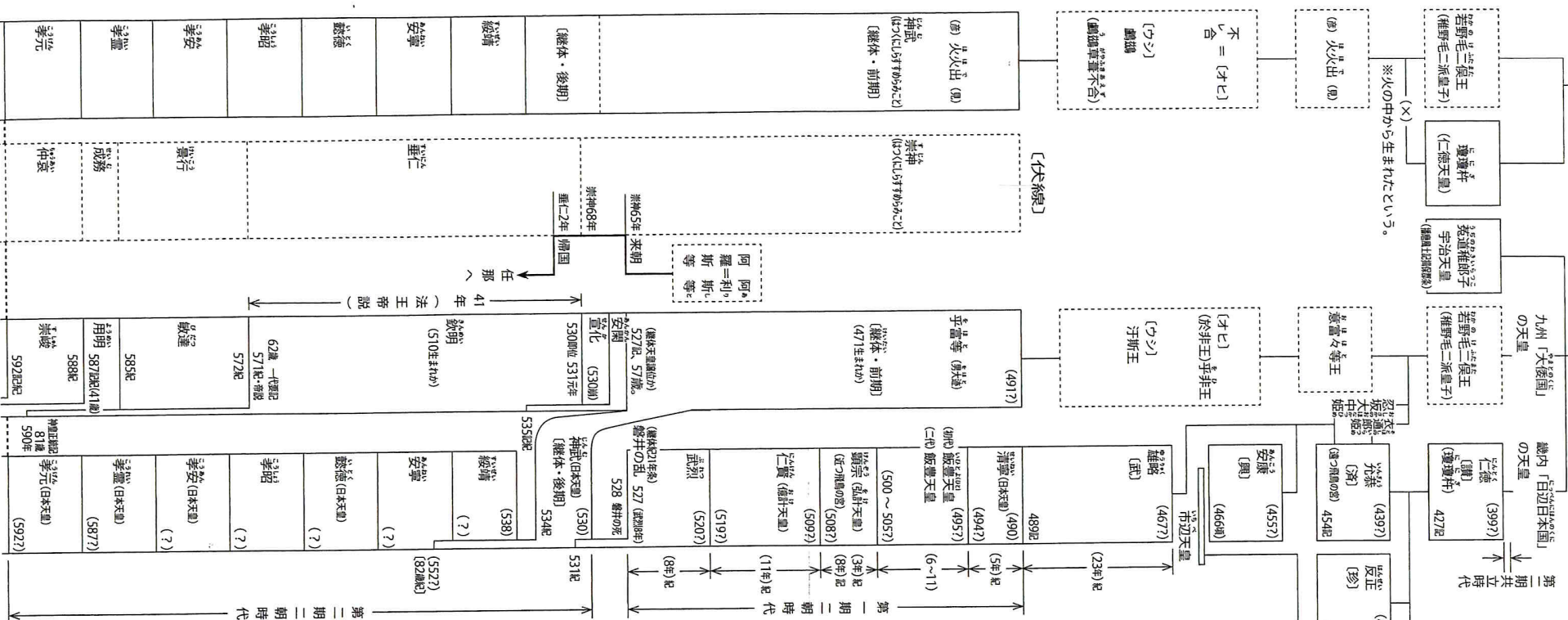
後醍醐天皇の皇子をしりぞけたので、これより以後、天皇の命が短くなった。(記)
つまり、長男(長女)が襲名している限り、同一名を名乗るという古来の風習は、後醍醐天皇(仁徳天皇)の時に廃止され、これに替わって、大陸の王位継承法が採用されることになったのであるうか。
これより後、王位は、嫡継に継承されてゆくことになる。

- ・ 殿末
周の太伯は、弟季歴に位を譲る為、江南にはしり、文身断髮して君長となり、吳国を建国した。
- ・ (77)
「倭人は自ら太伯の後と云う」と、魏略汲文・晋書・梁書に記されている。
前漢の武帝(在位前141～前87年)、簡趙王を滅ぼす。(史記・漢書)
* 簡趙王は、実は、太伯の末裔だったのではなかろうか。
・ (前104頃) 太伯の後、簡趙王を滅ぼす。会稽の黄治あたりから九州へ東遷開始。
・ 前97
崇神天皇即位。皇子連の自來国(後の磐城)中の樺南界の地に倭奴国を建国して王となったか。
倭奴国は、後漢末(220)の版図でいえば、倭国(北九州・山口地方)の樺南界に位置していたのであるうか。(後漢書倭伝)
- ・ (前28)
垂仁天皇の同母弟「倭彦」が薨じた時、殉死が始まった。(集神記・垂仁伝)
- ・ 57
倭南界の倭奴国が奉貢朝貢した。(後漢書倭伝)
- ・ 61
由道前守を菅世国(元の簡趙のことであろうか)へ遣わす。
- ・ 71
瑞を持ち帰った由道前守、殉死する。(記・紀)
- ・ 107
倭国王帥升は、生口百六十人を獻じ、謁見を願った。(後漢書倭伝)

- ・ 147
「倭・豊の間、倭国大乱。(後漢書倭伝)
(倭国と真子国との戦いであつたらうか)
倭国が真子国を奪い取り、北九州・山口地方に三十余国を置いて統治することになったように思われる。
- ・ 188
* 北九州・山口地方の小規模な倭国を併呑。
神功皇后、朝鮮半島南端の新羅国を併呑。南の倭国のことを「邪馬台国」(八女土国)と呼称するようになったか。
共立(男弟が卑彌呼をたすけて国を治めた)倭の女王卑彌呼、難米らを遣わし、魏帝に朝貢。(魏志倭人伝)
倭の女王卑彌呼、狗奴国・男王卑彌呼と素と不和。(魏志倭人伝)
卑彌呼死す。男王(素戔嗚)立つ。
国内服さず、当時、千余人を殺す。
卑彌呼の宗女皇孫(由心姫)が年33王とす。
素戔嗚、出雲国(今の近畿地方)へ下る。
* 「素戔嗚」に君臨するべからずと申し渡された素戔嗚は、中国山脈の山奥に下っていったのだらう。(記)三書子史年表、他参照)
神功皇后、晋の武帝泰初二年に晋朝(記)晋の力が弱まった。高句麗は素戔嗚(平壤あたり)を併呑。
高句麗は、引き続き「帯方郡」を占拠す。
* この頃、高句麗は、馬韓(百濟)・辰韓(新羅)を属国としたのであるうか。
* この当時、馬韓から百濟へ、辰韓から新羅へと国名が変わったようである。
倭は辛卯の年に來って海を渡り百濟(百濟)・百濟・新羅を破って臣民とした。
(近衛天皇御・神功皇后の三韓征討)
* 七枝刀に泰和四年(369)の銘有り。
* 天璽璽剣を献上。阿蘇の火を三輪山に移す。
* (77) 中つ国(東の南九州)を平定。朝鮮終焉。
* (77) 出雲国(近畿地方)の国譲り。
* 大國主、今の出雲に新しい出雲国をつくる。
* (77) 応神天皇、難波に大内宮を造宮。
* 391
広間土王即位。
* 396
広間土王、躬(みすから)水軍を率いて百濟を討ち、多くの城を落す。(近衛土王御時)
* 400
高句麗が倭軍を任那加羅まで追撃。(近衛土王御時)
倭軍は、帯方(帯方)の地にまで侵入して高句麗と戦ったが、大敗。(近衛土王御時)
* 407
京畿道北部で、再度大敗。(近衛土王御時)

新史物語
第巻第12
から転写して
下さい。
決して新しく
作らないで
下さい。
チェンが変更
のためです。

必ず、切断の線を引いて下さい。



- ・ 413 倭王、東晋^{とうしん}に入朝^{にうけう}。（晋書^{しんしよ}高帝紀）
 - ・ 420 東晋^{とうしん}にび、宋^{そう}起^{おこ}こる。
 - ・ 421 倭王^{やま}皇^み、宋^{そう}に入朝^{にうけう}。（宋書^{そうしよ}高祖^{こうそ}伝）
（に東^{とう}漢^{かん}とヤササのヤとてう^うに朝^{てう}の手を当ていれけいる）
 - ・ 425 同上
 - ・ 430 倭^や國王^{こくわう}、宋^{そう}に入朝^{にうけう}。（宋書^{そうしよ}高祖^{こうそ}伝）
（倭^や王^{わう}ヤササのヤとてう^うに朝^{てう}の手を当ていれけいる）
- ※ 仁徳天皇も履中天皇も、共に、「讀^{よみ}」という名で朝貢したであろう。

- ・ (433?) 讀 (履中) か死んで、弟宗 (反正) 立つ。
- ・ (7) 倭国王珍 (反正) 宋に入朝。(宋書高祖紀)
- ・ 438 倭国王珍 (反正) 宋に入朝。(宋書高祖紀)
入朝が反正王朝後になっ(たか)
- ・ 443 倭国王済 (允恭) 宋に入朝。(宋書高祖紀)
- ・ 451 倭国王済 (允恭) 宋に入朝。(宋書高祖紀)
- ・ (7?) 済 (允恭) 死す。世子興 (安履) 使いを遣わして貢献。(宋書高祖紀)
- ・ 460 倭王世子興 (安履) 宋に貢献。(宋書孝武帝紀)
- ・ 462 倭王世子興 (安履) を安履將軍・倭国王とする。(宋書陳留紀)
- ・ (7?) 興 (安履) 死んで、弟武 (雄略) 立つ。
- ・ (宋書陳留紀)
- ・ (489?) 雄略天皇紀の遺言は隋書・高祖紀の文章を点綴したものが、この阿曇ととも、"天下を共治する"ことを望んでいる。
- ・ (7?) ここに、二朝時代が出現してと考えたい)
扶桑略記は、「飯甕天皇、廿四代女帝」とし、皇胤阿曇尊は、「飯甕天皇、忍海辺女王正也」といふ、阿曇ととも天皇とする。

・503
(保康の母)

南田八幡画像を、次のように解した。

「日十六王」(敏達天皇)の癸未の年八月、
男弟主(太子健計主)が意美奈加宮(忍坂
宮)に生まる。……南田(百濟第25代武寧王
在位501～525年)の隋中興王(高州利二人
等)を遣わして、この鏡を作る」

*男弟主とあるのだから、日十六王は女性(姉)
なのだろう、と思われる。

- ・ 526 日本書紀紀年の継体20年 (526) は、武烈7年なのである。(継体紀20年条参照)
- ・ 527 「磐井の乱」は、二朝の戦いの一端を示しているようである。(継体紀2年9月1日条末尾参照)
- ・ (530?) 神武天皇(継体天皇重兄)、日辺日本国(近畿)の橿原宮で即位。(南説)
- ・ 530 欽明天皇(聖武天皇) (南説)
- ・ 531 「辛酉の年 (531) に『日本の天皇及び太子・皇子がともに死んだ』という奇怪な記事を書いた本書紀は載せている。(継体紀25年条)
- ・ (532?) 「日辺日本 (近畿) の武烈天皇及び太子・皇子がともに死んだ」ということを示唆しているのであろう。
- ・ 534 継体天皇(神武天皇) 退位か。(継体紀25条・南本記)
- ・ 538 欽明期の戊午年 (538)、畿内に仏教伝来か。
- ・ (552?) 継体上皇、崩御か。(弘明記)
- ・ 552 壬申年(552)、大倭国(ヤマト)に仏教伝来か。

- ・ 562 在位(在位)の天皇に「天皇」の尊号が与えられる。
 ・ (神皇正統記)「古の皇」として続いてきた『御代』の禁。
 (重く記す年条参照)

垂仁28年に始まった殉死は、仏教を敬う欽明天皇によって、禁じられたのであろう。
 (但し、殉死は孝徳天皇大化2年迄続く。

・ 574 厩戸豊聡耳皇子（聖德太子）誕生。
法隆寺釈迦像光背銘文の薨去の年から逆算。
（聖德太子）亀井朋一氏、日本ソノサービスマン、66頁

- ・ 587 キョフウノキョウ 物部守屋を討伐。
- ・ 592 ハセ 1 張が渡しとおもう所の⁵⁹³ ウツ 所⁵⁹⁴ を⁵⁹⁵ 断⁵⁹⁶ らむ⁵⁹⁷ という崇峻天皇の詔を聞いた蘇我馬子は徒党を集めた。東国直駒は、東（近畿地方）の孝元天皇を弑せまつたのである。

[illegible]

6

- ・縦長の用紙に横書きしている場合、インターネットの画面上では、非常に読みにくいですね。

- ・画面上部の『回転スーク』を押し、時計回り方向に90°ずつ、3度回転させると、通常の横書き文章になります。

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
	前期	前200	- 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 - 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。 (『三国志』韓伝)	【箕子達による百余国の時代】 (7~80年)		
	前期	前100	- 前104頃、倭人東遷開始か。 - 前97、崇神天皇即位 (紀)			
	中期	B.C. A.D.		倭奴国 (極南界) (1)		
	中期	(1)	57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。			
古墳時代	後期	-100	107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。	【倭人による30余国の時代】 (小銅鐸鹿絶)		
	後期	-200	147 } 倭国大乱 188 }			
	後期	-300	239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【男王卑彌呼素】 男王素(素戔嗚)を追放。素、母の根国を建国。(近畿に古墳出現) (銅鐸鹿絶)		
	後期	-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	(倭人による統一) 出雲国の国譲り [現在の出雲国へ国替え] (銅鐸鹿絶)		

・右頁に掲載下さい。

・『新・やまと物語』第三巻 第3巻から転写して下さい。

(1)、(2)の位置を、(3)にして下さい。

(破線) 赤い点線に引くと

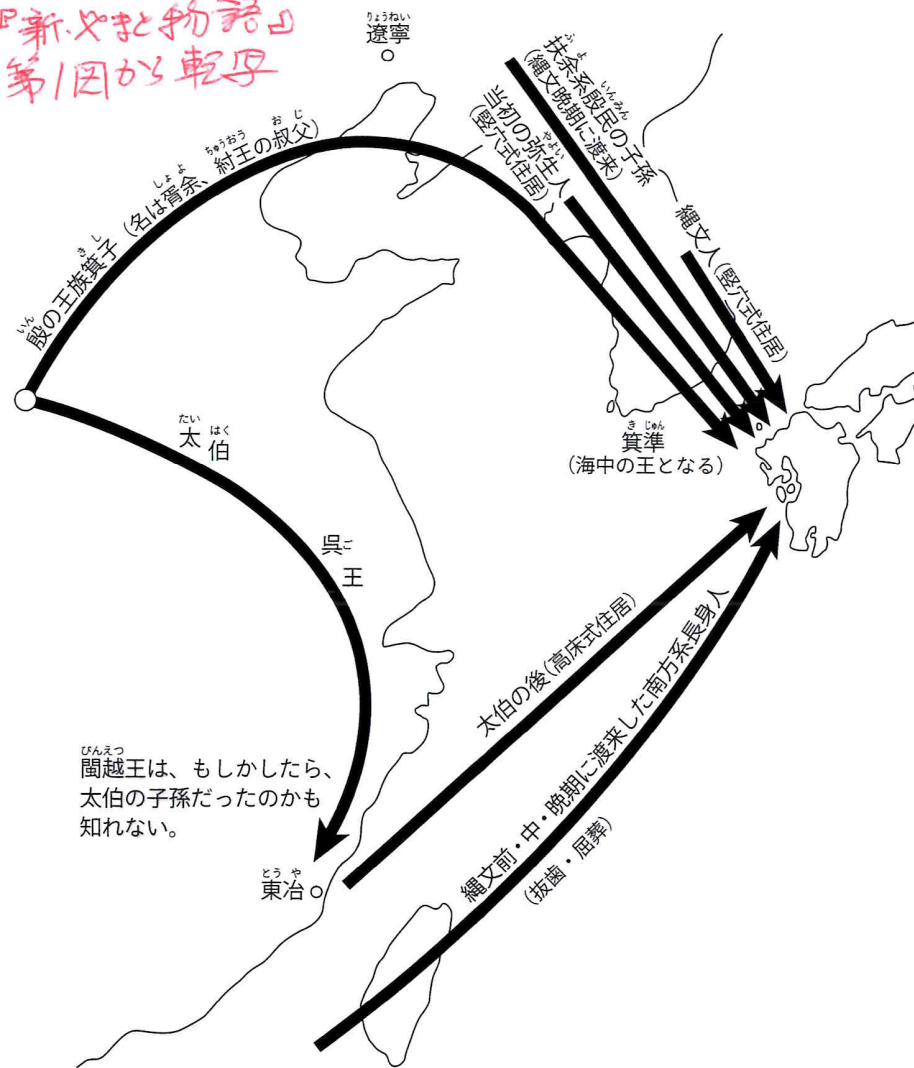
(1) 近畿地方の高度な文化は、弥生時代に突然衰退する。その後、近畿地方が急激に発展する。

・つまり、近畿地方の高度な文化と、次の古墳時代とが、スナリとはつながらない。

【男王卑彌呼素】 → 【男王卑彌呼素】

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
 (『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156~7頁参照)

・左頁に掲載下さい。
 ・『新・やまと物語』
 第1図から転写



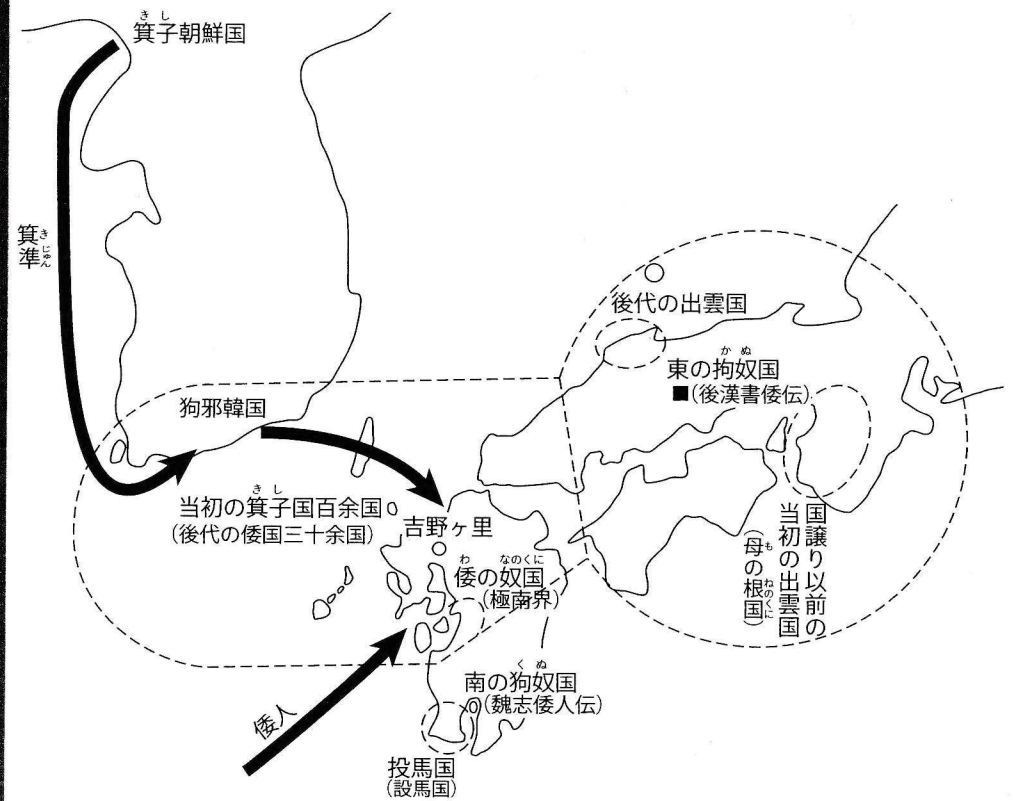
第1図 六つばかりの種族 (想像図)

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
	前期	前200	- 前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 - 前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。 (『三国志』韓伝)	【箕子達による百余国の時代】		
	中期	前100	- 前104頃、倭人東遷開始か。 - 前97、崇神天皇即位 (紀)	倭奴国 (極南界)		
	後期	B.C. A.D.	57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。 147 } 倭国大乱 188 } 239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 248 (?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【倭人による30余国の時代】		
古墳時代		-300		男王素 (素戔嗚) を追放。素、母の根国を建国。 (近畿に古墳出現)		
		-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	出雲国の国譲り (現在の出雲国へ国替え) (銅鐸廃絶)		

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
 (『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照)

・右頁に掲載
 ・『新・ヤマト物語』第2図が転写



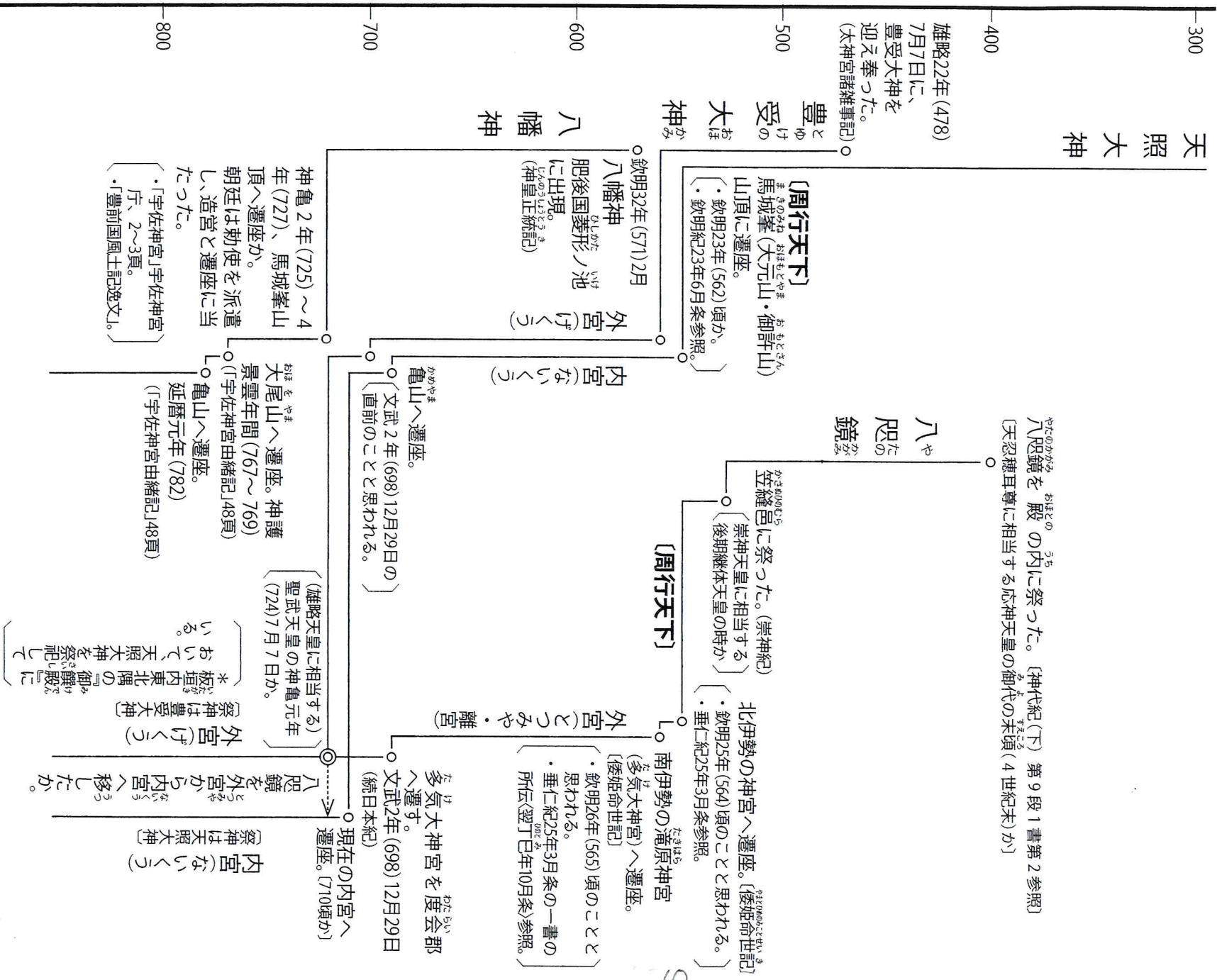
第2図 東西二つの文化圏の対立 (想像図)

10表 「推古朝」の寺院建立等一覧

西 暦 (年)	元 号 (年 月 日)	緯
593	推古天皇 元年 4月10日	・厩戸皇子立太子 (20歳)。(紀等) *是歲「四天王寺」を玉造に造り始めたか。(紀・補関記等参照) ・等与刀弥々大王、小国日辺日本国の王「栗散王」として即位か。(紀・伝暦・他参照) ・上宮聖德皇、伊予の湯に幸けす。(風土記) [九州へ向かう途中、伊予に立ち寄られたであろう] ・九州 (肥後国) に「法興寺」完成か。(紀参照)
594	2年 2月1日	
596	4年10月—	
598	11月— 6年 4月15日	・上宮王、勝鬘経を講き、播磨国の田300余町を「法隆寺」の地と為す。(法武帝説) (用明上皇の為、九州 (肥後国) に「法隆寺」の建立が企図されたか)
600	8年—	・倭王、隋に使者を遣わす。(隋書倭国伝)
601	9年 2月—	・大和国に「斑鳩宮」の造営が企図される。(紀参照)
603	11年 2月— 10月4日 11月— 12月5日	・大將軍 (西の国の皇太子押坂彦人皇子) と 將軍來自皇子、薨去か。(紀) ・都を豊浦宮から小墾田宮に遷す。(推古天皇の都は九州 (肥後国) にあったのだろうか) ・大櫓および鞍を作り、また旗幟に糸がく。(即位のときなどに、大櫓をたてることが、後の例である) (紀) ・冠位12階を制定する。(紀) (冠位12階は、東西二朝の朝臣達を一系列下に置く為に定められた、と考えてみたい)
604	12年 1月1日	・冠位を始め賜う。(紀) *恐らくこの頃、等与刀弥々大王は、儲后 (皇太子) となられたのであろう。(補関記等)
605	4月3日 13年 4月1日	・皇太子、憲法17条を作る。(紀) 「一朝の世となった当初に、「朝臣達の心得」として作られたのではなからうか) ・鞍作鳥を、「元興寺」の丈六の仏を造る工とする。(紀) 〔大和国に「元興寺」建立が企図されたのであろう〕
606	10月— 14年 4月8日 7月—	・皇太子、大和国の「斑鳩宮」に遷る。(紀・伝暦) *用明上皇が、「子、遠く斑鳩に別る。朕の快からざる所なり」と仰せられたのだろう。 ・花祭 (誕生会) の是の日、九州の「法隆寺」の為の銅の仏像 (薬師如来像) と、大和国の「元興寺」の為の繡の丈六の仏像とを、並びに造り終わったか。(紀参照) ・是歲 (7月以前に) 推古天皇から賜った播磨国の水田100町は、大和国の「斑鳩寺」に納められたのであろう。(紀) 〔当初の「斑鳩寺」(若草伽藍) の造営が企図されたと解したい〕
607	15年—	・『法隆寺』のもともとの本尊であったという薬師如来像の開眼式が行なわれ、仕え奉ったのであろう。(薬師如来像光背銘参照) 〔この頃、九州 (肥後国) に「法隆寺」が完成したと想像される〕 ・隋の客「裴世清」等京に入る。(紀) ・(花祭の) 是の日、大和国の「元興寺」の金堂内に、鞍作鳥が丈六の仏像を入れたのである - う。(飛鳥大仏銘文・紀参照) ・夜半に、大和国の「斑鳩寺」(若草伽藍) 炎上。(補関記参照) *この時、もともとの釈迦三尊像が火中し、小片に砕けたのであろう。
610	18年 4月30日	・聖德太子発病。 *釈迦三尊像発願。焼けた釈迦三尊像を基にして、再造することになったのであろう。
622	30年 1月22日	・聖德太子薨去。(49歳) ・釈迦三尊像、発願からわずか13ヶ月あまりで完成。(釈迦三尊像光背銘参照)
623	2月22日 31年 3月半ば	〔この頃「斑鳩寺」(現存する大和国の法隆寺) が再建された、と推察される〕
628	36年 3月7日	・推古天皇、崩御 (75歳)。
669	天智天皇 8年 冬	・大和国の「斑鳩寺」に火災。(講堂・回廊北半部が焼失し、この時、釈迦三尊像の大光背が損傷したと思われる。また、五重塔4階に飛火したものの、消火されたものではなからうか)
670	9年 4月30日	・夜半の後に「法隆寺」炎上。(紀) [推古18年 (610) の干支1巡後、つまり天智9年 (670) の4月30日夜半の後に九州の「法隆寺」が奈良に付されたのであろう]

*「現法隆寺は、推古朝の創建以来、一度の火災にも遭遇していない」と奇伝はいう。
(「聖德太子」上原和、講談社、20頁。但参照)

右頁全面に隈原一杯の出し掲載下さし。156頁からコビー(17下さし)。(44頁) 530か大要だから、新(作成)作(44) 日新、ヤササ物語第1巻 (第9来同) 第41表 内宮(天照大神の宮)・外宮(豊受大神の宮)・外宮(天照大神の離宮)・ 八幡宮の変遷の歴史(想像)



新・やまと物語

第二卷

十三

目次

第1巻

第2巻

①『新・やまと物語』の題目

まえがき
序論

この物語の主張
系譜

荒筋

『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事

新・やまと物語

第一編 神代〔先史時代〕応神朝

第一章 天地開闢

第二章 激動の黎明期

第三章 極東地域にみられる各種文化についての考察

第四章 北九州・中国・近畿地方の遺跡が語る激変の時代

第五章 東西二つの文化圏の対立(当初の弥生人と箕子の対立)

(以下、インターネット)

第3巻

第4巻

第7巻

第8巻

第六章 太伯の後

第七章 倭国創建(会稽の東治から東遷。箕子国内の極南界に倭奴国を建国)

第八章 垂仁天皇(五十七年、極南界の倭奴国、後漢へ朝貢)

第九章 景行天皇(一〇七年、倭奴国、後漢へ朝貢)

第十章 成務天皇(倭国大乱。倭国、北九州・山口地方に三十余国を置く)

第十一章 仲哀天皇

第十二章 神功皇后(息長足姫尊)

第十三章 三国鼎立

第十四章 洛陽の変遷の歴史

第十五章 衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史

第十六章 景初三年春

第十七章 魏国への旅立ち

第十八章 洛陽の都

第十九章 帰途

第二十章 単位

第二十一章 倭国北辺の国々

第二十二章 新王城

第四十二章 朝鮮半島の歴史

第四十三章 応神天皇(中)

第四十四章 東の拘奴国壊滅(中国地方平定)

第四十五章 母国『出雲国』の国譲り(近畿地方を譲り受ける)

第四十六章 応神天皇(下)

第二編 繰り返される二朝の慣例(仁徳朝・崇峻朝)

第四十七章 第二期共立時代(大雀命・宇遲能和紀郎子)

第四十八章 仁徳天皇

第四十九章 謎の世紀『五世紀』

第五十章 裝飾古墳

第五十一章 近畿地方の古墳

第五十二章 埴輪

第五十三章 隠された二朝時代の経緯(第一期二朝時代・第二期二朝時代の経緯のあらまし)

第五十四章 平富等大公主(後の継体天皇)の出自について

第五十五章 雄略天皇(「共治国家」「共治天下」を望む遺詔)

(第13巻) 13

第9巻

- 第五十六章 〔天上国九州の天皇〕 継体天皇
第五十七章 〔日辺日本国の天皇〕 清寧天皇 〔白髮武
廣國押稚日本根子天皇〕
第五十八章 飯豊天皇
第五十九章 顯宗天皇 〔弘計天皇 〔弟〕〕
第六十章 仁賢天皇 〔億計天皇 〔兄〕〕
第六十一章 武烈天皇 〔仁德系の王統最後の天皇〕
第六十二章 時代の圧縮
第六十三章 第一期二朝時代の終焉
第六十四章 第二期二朝時代の幕開け
第六十五章 欽明天皇 〔天國排開廣庭天皇〕
第六十六章 敏達天皇
第六十七章 用明天皇
第六十八章 崇峻天皇 〔朕が嫌しとおもふ所の人を断
らむ〕
第三編 日本の歴史改編、そしてその後 〔推古朝〕
現代
第六十九章 第三期二朝時代 〔天上国の推古天皇・日
辺日本国の等与刀弥々大王〕
第七十章 推古朝の寺院・仏像

第13巻

- 第九十一章 文武天皇
第九十二章 元明天皇
第九十三章 奈良時代
第九十四章 平安時代 〔上〕
第九十五章 小野小町
第九十六章 平安時代 〔下〕
第九十七章 南北朝時代 〔二朝時代〕
第九十八章 戦国時代
第九十九章 近世 〔安土・桃山・江戸時代〕
第一百章 現代及び未来
あとがき

②『新・やまと物語』第13巻の目録

新・やまと物語

第三編 日本の歴史改編、そしてその後 〔推古朝〕
現代

- 第九十四章 平安時代 〔上〕
第九十五章 小野小町

追加資料と、
頭を揃える

参考資料

追加資料

- 『七国神社由緒記』……
『肥後国山本郡正院郷小野里小町略縁起』……
『千支表』……
『図・表・写真図版索引』……

- 第九十六章 平安時代 〔下〕
第九十七章 南北朝時代 〔二朝時代〕
第九十八章 戦国時代
第九十九章 近世 〔安土・桃山・江戸時代〕
第一百章 現代及び未来
あとがき

第12巻

- 第八十五章 壬申乱
第八十六章 宗像神社
第八十七章 天武天皇 〔上〕
第八十八章 新城 〔平城宮〕
第八十九章 天武天皇 〔下〕
第九十章 持統天皇

第11巻

- 第八十四章 天智天皇
第八十三章 高市天皇 〔舒明天皇の重祚〕
第八十二章 齊明天皇
第八十一章 孝德天皇
第八十章 皇極天皇
第七十九章 舒明天皇
第七十八章 蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御

第10巻

- 第七十一章 阿蘇山
第七十二章 隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わ
しむ
第七十三章 国に二の君非ず
第七十四章 皇太子廐戸豊聰耳皇子
第七十五章 金人の夢告
第七十六章 太子の苦悩
第七十七章 聖德太子の薨去
第七十八章 蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御

〔第13巻〕 14